

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四・三・二第 卷九十五第

彙報

戰時國債消化促進の方法……………	神戶正雄
企業國家性の問題……………	谷口吉彦
日露戦争後の外資輸入……………	堀江保藏
王濤の紙幣論……………	穂積文雄
アメリカ海運政策論批判……………	佐波宣平
國策コンツェルンの形成と構造……………	靜田均
方法論史研究の意義……………	出口勇藏
租税・補助金と獨占價格……………	木下和夫
二つの地方財政論……………	汐見三郎
Sクズネツツ「一九一九年乃至一九三五年の國民所得と資本形成」……………	岩根達雄

行發月十年九十和昭

## 方法論史研究の意義

——ハインリッヒ・ディーツェルを廻つて——

出口 勇 藏

古典學派の經濟學が成熟して市民社會の經濟生活の諸々の様相が法則的一般性の下に認識されるやうになるにつれて、その科學の科學性が、他の社會科學の諸部門と比較して、いかなるところに在るのか、と云ふ一層原理的な問題が、すなはち方法論的な問題が、提起されざるをえなかつた。さうしてその方法論的な問題をみづからの學問的課題として取上げた人は、J・S・ミルであつた。古典學派の成熟に伴ふ方法論の生成と云ふこの學史的な情況について特に注目すべきことからは、方法論の生成が傳統的なこの科學の思惟の方法がそれ自身として反省の對象になつたと云ふよりは、むしろ「自然主義」の名の下に總括せられる傳統的な思惟の方法が新しい對抗者を廣義における「歴史主義」的な思惟方法の内に見いだして、それとの對決において、「自然主義」がその方法論的な反省を強ひられたと云ふこと、ミルの場合について云へば、「歴史主義」的な對立者に對して「自然主義」の誇りに満ちた傳統をば擁護することが、この方法論の生成の本質的な現實的根據であつたと云ふことである。凡て方法論的な思索は、あるがままに受取られてそれによる一層綿密な對象の分析にと歩み進まれる研究意欲がなにかの對立者を認めざるをえなくなつて、みづからの研究方法それ自身をひるがへつて研究對象とし、本來の研究

對象の一定の理解の上で、研究方法自體をば分析し整理し、一つの思索體系として構成し、さうしてでき上つた思索體系が、本來の研究對象といかなる關係に立ち、それらの交渉からいかなる認識の成果が期待せらるべきであり、また期待されるべきではないか、と云ふことを論理的に決定することに成り立つ。ミルの方法論の場合においては、古典學派の傳統的な思索の歴史主義的な思索に對する擁護と云ふ現實的根據に基いて生成した彼の方法論は、古典學派方法論の確立と云ふ經濟學史上きわめて重要な一つの成果を生み、その成果はそれ以後の古典學派的な、「自然主義」的な思索に對して認證を與へるとともに規準を明示し、古典學派の性格を現實的な根據を越えて論理的に解明し、經濟學の科學性の確立と云ふ原理的な課題の解決に向かつて、著しい貢獻をもたらしたのである。<sup>1)</sup>

ミルの場合に見られるやうに、すべて方法論的な思索については一般に、次のことがら主張されてよいであらう。

(一)——方法論的な思索はある性格を有つ科學の考へ方がある程度の對象認識の成果を收めてゐる時にはじめて現れる。

(二)——方法論的な思索は違つた性格を有つ科學の考へ方が自己の面前に立ち現れて、みづからに向つて攻撃を挑まうとする氣配が見える時に、その對抗者との對決の形をとつて現れる。ひたすらに本來の認識對象に身ぐるみ外に向かつてゐた關心が、その認識對象から離れて内に屈折し、新しい對抗者の前で身づくろひを行ふことによつて、それは生成する。従つて方法論的な思索は、時間的にも論理的にも、ある考へ方の生誕よりも遅れてはじめられると云ふことが特徴的である。

1) J. S. ミルの方法論については拙著『經濟學と歴史意識』269頁以下を参照。

(三)——しかしながら、方法論的な思索が科學本來の認識對象から離れて研究方法みづからが内に屈折して身づくろひを行ふところに成り立つと云つても、本來の認識對象を全然忘却して了ふと云ふことを意味しない。研究方法はそれまでに達成された對象認識の成果をば暗黙の内に前提し、研究對象はすなはちその成果によつて成り立つ聯關に他ならないと云ふこと、云ひ換へると、本來の研究對象と云へばその成果によつて聯關づけられた意識せられた對象界以外のものではありえないと云ふことを了解してゐる。方法論的な思索が新しい對抗者との對決によつて遂げられると云ふとき、その對抗者の挑戦も亦、それ自身の包懷する對象界を、すなはち違つた研究方法でのみ分析されると信ぜられる認識の成果の聯關によつて生ずる意識せられた對象界を、方法論的命題の前提としてゐる。ゆゑに兩つの研究方法が相争ふ場合には、それぞれの立場がそれらに特徴的なある意識せられた對象界をそれぞれの主張の裡に藏してゐて、それぞれの立場の認識に力めてゐるのであると云はなくてはならぬ。ミルの場合について云へば、「自然主義」の立場において認識せられきたつた市民社會の經濟生活の諸相が聯關づけられて生ずるヨーロッパの資本主義的經濟の全貌が、彼の方法論的命題の提出の背後に在つてそれを支へてゐたのである。さうして廣義における「歴史主義」的な思维方法もまた、その主張の背後に、歴史主義的な把握によつて認識せられさうに思はれる實在の相を絶えず主張の支柱として有つてゐたのである。だから、二つの考へ方から生ずる異なつた主張は、それぞれ相異なつた實在の一面をば究極の根據としてゐた、と云はなければならぬであらう。しかしながら、相争ふ二つの立場がそれぞれ固有な意識せられた對象界を究極の根據として有つてゐると云ふことは、二つの立場が全然没交渉な對象界についてそれぞれ主張を行なつてなるのであり、兩者の間に共同な對象界は見る事ができぬ、と云はねばならないであらうか。もしさうであるなら、方法論的な

對決と云ふことは全然無益であり、各派各様の主張で以て獨斷的な勝利の雄叫びを擧げると云ふこと以上に、科學性確立の向上と云ふ方法論的な課題の解決に資するところはなくなつて來るであらう。さうなれば方法論的な思索は實は科學の自慰であり、一層つきつめて云へば自殺でしかなくなつて來るであらう。さうではなくして、方法論的な思索の前提には意識せられた對象界が宿されてゐると云ふことは、實はそれぞれの立場が共通の對象界を有しながらも、しかもそれらがその對象界の一面の真相をば全面的なものやうに思ひ誤つてゐると云ふことを意味するのではなくてはならない。「自然主義」的な立場で獲得せられる對象界も、「歴史主義」な立場から直感せられる對象の世界も、一つの共同の實在界をばヨーロッパの資本主義經濟社會と云ふものに有つてゐるのであり、もしそこに二つの異なつた對象界が意識せられて方法論的な立場が相争ふと云ふならば、その分裂・對立はその共同の實在界に固有なものであるものによつて生ずるのである、と云はねばならないのである。要するに、方法論的な思索が本來の認識對象から眼をそらして身づくろひを行なふ時に現れると云ふことは、以上の意味において、對象を全然忘却して了ふと云ふこと意味するのでは決してなく、それぞれの立場で獲得される對象界の聯關をば背後にひそめて、その認識を意圖し、それ以後の研究に向かつて規準を與へようと意慾し、且つ對抗者によつてはその聯關の獲得に達したいと云ふ批判を相互に行なふものなのである。

(四)——すべて方法論的な思索が上記のやうな特色を有つとすれば、それは當然に歴史的な問題情況に端を發し、その解決もしたがつてまた歴史的な意義を必然的に有つてゐなくてはならぬ。その意味から云へば、歴史的なる方法論の繼起は方法論史の流れにただよう經過的な里程碑にすぎず、方法論史の潮流の末端である現在の學界に支配的な方法論的な思索は、歴史的な方法論の總決算を呈示してゐる、と即斷せられるかも知れない。もし

さうであるならば、方法論史の研究はそれ自體ただ、對象的知識を、ザッハ・ケントニス<sup>1</sup>を、豊富に有つと云ふこと以上に學問的な意義を有たないことになるでもあらう。しかるに個々の經濟學說の史的展開についても主張されるやうに、歴史的な學說の展開は、その命題の實在的根據がいかに歴史的な問題情況と密接に結びついてゐようとも、その命題そのものの科學性は、歴史的な問題情況の被拘束性を破つて、ただ經過的ではなく、歴史の潮流の中にたゞよひながらも實はそのことのゆゑに歴史的經過性に關しない永續的な性格を論理的に有つてゐるのである。況してや、研究方法の反省的な身づくろひに他ならぬ方法論における命題は、ただに經過的な意味をしか有たないのではなく、永續的な意義を有ち、それ以前の學說に對しても、またそれ以後の學說に對しても、認識に對する方法的な支配力を具へてゐる。方法論的な命題の出現によつて、以前には深く意識されることのない命題や法則の意義が明瞭になつてそれらの科學性を向上させるとともに、それ以後に續いて現れるべき命題の提出に當つては、方法論的な規準がそれを規制してその命題に向かつて一層嚴密な科學性を要求し、また賦與して、科學性の向上を自覺させずにはおかないはずである。身づくろひを濟ませて後あらためて本來の研究對象に認識的な交渉を有つ研究方法は、命題の科學性について以前とは異なつた自覺をば有たないわけにはいかないのである。さうして認識の科學性のこの向上こそは、正に方法論的な思索の科學に對する任務であり貢獻であるに他ならないのである。

(五)——方法論的な思索の科學に對する意義が上の如くであることが承認を受けるとしたならば、かかる思索の史的發展を研究する方法論史に向かつて、われわれは何を期待すればよいであらうか。經濟學の方法論史は、方法論の歴史的な繼起をば單にザッハ・ケントニスとして知ることであるのであらうか。歴史的な様々の方法論

の内容を知ることと離れてこの研究分野が成り立たないことは云ふまでもない。けれども方法論的な命題をば單にザツヘとしてだけ把へることにその研究は満足してはならないのである。以前にわたくしが概略的に論じ且つマックス・ウェーバーやミルの方法論についてその貧しい遂行を試みたやうに、方法論史の研究の目指すところは、方法論的命題の歴史的展開の諸相を單にザツヘの羅列において把へるのではなく、提出せられた命題を通してその奥に潜む方法論者の方法意識とわたくしが呼ばうとするものをつかみ出し、その方法意識の史的展開と深化との跡を見さだめるところにあるのである。<sup>2)</sup>この主張は奇矯の言と思はれるかも知れない。以下そこばくの言を費してこの主張の意味を明かにしたいと思ふ。

前に述べたやうに、經濟學の方法論はこの科學における相異なつた考へ方が對立する時に生じた。その對立は何等かの意味において經濟學の危機を孕んでゐたと云へる。その危機的な問題情況を現實的な根據として、その打開のために、經濟學は自ら省みて身づくろひを論理的に整へようとするのである。その時、身づくろひはれる身體が方法意識と云ふものである。身體に血が通つてをり生活實踐の唯中に置かれてゐるやうに、方法意識とは生活意識の知的な側面が經濟生活に關して取る態度であり、日常生活の生活意識と血を分け合つてゐるところの恒常的な、その意味で歴史を一貫して存在してゐる人間に固有なものである。方法論は經濟學の危機を現實的な根據として、有つとともに、論理的な身づくろひを纏つてゐる。しかしそれが方法意識にまで遡及されると、現實的な根據が洗滌されて、歴史的な被拘束性を脱却する。論理的な根據づけと云ふ外殼もそこでは脱殼されてしまふ。さうして方法論の歴史性と論理性とはこの方法意識に媒介せられ、その上で親しく落ち合ふに至るのである。方法意識と云ふ超歴史的な人間固定の精神性の上では、方法論の歴史性はその經過的な意義を脱け出して恒常的

2) 前掲拙著を參照。

な存在を保ち、方法論のそれぞれの論理性は互ひに解け合つて、方法論史は方法意識面で合流する。さうして方法論史は方法意識の深化の一序列として把へられるのである。方法意識の深化の系列として把へられるところ、方法論史の課題は果たされたと云はねばならぬ。このやうな意味において、方法論史はザッハ・ケントニスの集積ではなく、そのザッハへの奥に潜むメンシェン・ケントニスの深みに入り、そこに層を成して蟠まつてゐる方法意識の史的発展を認識することを課題とするものである。

(六)——方法論的な思索が有つ歴史性と超歴史性との二重の構造に關して、注目すべきことがあるであらう。その思索が單に歴史的ないし經過的な意義を有つだけであると云ふ皮相な見方によれば、ある現實的な問題情況に應じて生じた方法論的命題の學問的意義は、ただその問題情況に對してだけ經過的な意義を有するにすぎないのであつて、それ以上に特に後に現れるべき科學の命題に對しては、その方法論は論理的な支配力を有たず、科學に對する規準とはなりえない、と云ふ考へ方が成り立つ。丁度、學說史上のある命題は後の時代の命題とは全然縁のない死せる骨董でしかないと考へられるのと同様に、歴史的な方法論は現在においては全然科學的に意義を有たない、とする態度が、この皮相な見方から生ずる一つの歸結なのである。このやうな抽象的な見方に對して多言を費してその蒙を説くことはわれわれの興味を惹かないことがらであるけれども、實際方法論に關する論策の中には、かやうな謬見がしばしば現れてゐるのである。このやうな考へ方は經濟史上の畏敬すべき先人達の業績をないがしろにし、斯學の科學性の向上ではなく後退をば招致するところのゆるしがたい獨斷である。さうしてかかる皮相な獨善的な見方から研究者を脱却せしめて、經濟學の史的發展——それが他の科學の歴史に比べていかに短かからうと——の前に眞に謙虛ならしめ、この科學の科學性の向上に向かつて努力をおしまなかつ

た先人達の業績から學ぶべき多くのものを汲取りそれをみづから半芻し追體驗することを得しめるとともに、「ほ且つ」經濟的實在の真相に一層近迫しうるに足る方法意識の獲得を目指す勇猛心を起こせることはまた、經濟學の方法論史の研究が有つ一つの責務でなくてはならない。

以上の覺書はわたくしが經濟學の方法論史の研究に對して有つてゐる認識とその研究に寄せてゐる關心とを列擧したものである。最初の二つの事態は人々の注意を容易に惹くであらうけれども、(三)以下の事態は必ずしもさうではないであらう。それゆゑ、一人の方法論者の研究業績を手引として、それらの事態についていささか解明を試みても、無益ではあるまいと思はれる。さうして私見の解明のために手引としてここに登場をうながす方法論者は、ハインリッヒ・ディーツェルである。

## 二

ハインリッヒ・ディーツェルは獨特の風格をそなへた經濟學者であつた。理論の精微にして整然、毫も妥協をゆるすことのない點、時事問題に應ずることの鋭敏で多作とは云へないにしても多方面の論稿を物した點、論敵に立向ふや實に峻烈であつた點、立場の首尾一貫して終世動搖の跡を遺さなかつた點などが、彼の學風の描寫に當つて著しく目立つた特色である。彼が終世遂に纏つた大著を遺さなかつたことは、マックス・スウェーバーについてヤスパースが述べてゐる「断片性」(as Fragmentarische)にも似かよつてゐると云へるかも知れない。彼は若くして方法論的思索に専念し、相當多數の論文を發表してをり、その業績から見ても、われわれはディーツェルを第一流の方法論者と評するに吝かであつてはならないと思ふものである。「註」以下彼の方法論を紹介しつつ、方法論史研究についての上述の私見の解明に當たるであらう。

【註】マイツェルの方法論に關する論文を年代順に掲げれば次の如くである。

Ueber das Verhältnis der Volkswirtschaftslehre zur Socialwissenschaft (Dissertation) (1882); Der Ausgangspunkt der Socialwissenschaft und ihr Grundbegriff (1883); Beiträge zur Methodik der Wirtschaftswissenschaft (1884); Rezension über Menger's „Untersuchung über die Methode der Socialwissenschaften usw.“ (1884); Theoretische Socialökonomik Bd. I (1895); Selbsteresse und Methodenstreit in der Wirtschaftstheorie (1911).

先づ第一に、ディーツェルがいかなる現實的な問題情況から方法論的な思索に當つたかと云ふことを確かめておく必要がある。彼に方法論的な思索を強ひたのが經濟學における「自然主義」と「歴史主義」との對立、抗爭と云ふ容易ならぬ危機であつたに違ひない、と云ふことは、彼の研究の發表年次を見れば直ちに感づかれることであらう。經濟學における當時の危機は、オーストリアのメンガーの著書の出版を契機として國際的な波紋を呼び起こした。しかしディーツェルはメンガーよりも早く、危機打開の身づくろひを學位論文において始めてゐたのである。だからメンガーの歴史學派に對する方法論的な挑戦は、ディーツェルの思索を初めて觸發したのではなかつたのである。このことを明瞭に物語るものに、メンガーの『方法論研究』に關するディーツェルの長文の紹介がある。<sup>3)</sup>そこで第一に氣付かれることは、經濟學界の危機をば外國人メンガーの手を藉りず、ドイツの學界の自力によつて打開しようとする意欲である。彼は歴史學派が經濟學の理論の發展を妨げてゐると、メンガーのやうには、思へない、と云ひ、シュモラー自身の方法的原理をば「嚴密な自己批判で以て吟味するならば」意見の對立はなくなるであらうことを期待してゐる。だからメンガーが始めようと思ふやうな方法論の『改良』ではなくて、「融和」の可能性があることを示すところに、ディーツェルの思索の努力はそそがれる。<sup>4)</sup>さうして實際にこのメンガー紹介の一文は、メンガーとの對質と云ふよりもむしろシュモラーの方法論的原理の批判に終始してゐる

3) Rezension über Menger's „Untersuchung usw.“ (Jb. für N-Ö u. Stat. N.F. 8 Bd.—1884—, S. 107—124, S. 353—270.)  
4) ibid. S. 115, 116.

のである。外國人の指摘を待つまでもなく、歴史學派の原理の自己批判からドイツ人自身によつて學界の危機を切り抜けようとするこの態度は、デイーツェルよりも二十年おくれて同じく方法的な思索を始めたマックス・ウェーバーにおいても見られるところであつて、ドイツに支配的な歴史學派の内部における方法的な對立を物語ると共に、歴史學派自身の學問的良心が旺盛であつたことを示してゐると云つてよい。同じく歴史學派の陣營にあつても、ワグナーは理論としては自然主義の立場を捨てなかつた「理論家」Dogmatikerの群に屬してゐた。さうしてデイーツェルはワグナーの弟子として學界に現れた人だつたのである。

第二にあらかじめ注意しておくべきことは、デイーツェルが歴史學派中の「理論家」に屬し、歴史學派の主張の自己批判によつて學界の對立の「融和」を圖らうとした事情に基いて、彼の方法論に寄せる關心は専ら經濟理論の基礎理論にある、と云ふ點である。さうして彼が多く論稿を發表してゐる經濟政策論に關しては、彼の儂く理論の原理に基いて、歴史學派の人々と往々見解を異にすることはあつても、經濟政策學の方法的原理に關しては歴史學派の人々と共通の見解に立つてゐるし、また歴史認識についても、極めて正鵠を得た實證的感覚をひらめかしてゐて、彼がこの點についても歴史學派の洗禮を受けそれをそのまま受け容れてゐた學者であることを物語つてゐる。この點において、彼の方法論的思索の地平はマックス・ウェーバーよりも狭少であつたと云はねばならぬ。ウェーバーにあつては方法的思索は、社會科學における歴史、理論および政策の三立言部門に互る問題の全體に注がれてゐたのであつたから。

さて、上の二つの豫備的事項を注意をしておいて、然らば經濟理論についてのシュモラーの主張はデイーツェルによつていかに批判されたのであらうか。シュモラーの主張に従へば、經濟理論は「歴史的—統計的」でなくて

はならないとともに「倫理的—政治的」でなくてはならないはずであつた。もしさうであるならば、國民經濟學の理論は、國民經濟の個別性に基いて、理論は一つであることはできず、時間的な意味からも空間的な意味からも、多くの國民經濟理論の存在を許容せねばならないことになるであらう。しかるに經濟學の理論は理論として超歴史的な妥當性を要求し、また國民經濟の具體的な相の雑多であるのに無關係に、唯、一つでなければならぬ。シュモラーの主張は、このやうな意味で、理論自身の否定とならなくてはならないのである。だから、メンガーが歴史學派に鋭利な批判を向けたことは正當であつた。

しかしながら、メンガーの方法論は積極的に正しかつたか。メンガーが經濟學に於いて「存在するもの」と「存在すべきもの」との混同を防ぎそれらの完全な分離を圖らうと力めたことはまことに正しかつた。けれども、ドイツツェルによれば、メンガーは經濟理論に向かつて「精密方法」を要請しただけであつて、その方法は根據づけを行なはれたと云ふことはできない。何となれば、メンガーが「精密方法」を取らうとする場合、彼はその方法が資本主義經濟における經濟行爲の動機から見て、「現實的に」一致すると云ふ根據から是認されると主張するけれども、方法論的研究は、かやうな「現實的根據」を擧げることでは足りるのではなくして、むしろ方法の「論理的な根據」を明示するのでなくてはならぬ。だからメンガーの方法論には欠けるところがあると云はねばならないのである。<sup>5)</sup>このやうに考へるドイツツェルが方法論に關して有つ關心は、ひとへに經濟理論の「論理的な根據」と云ふ點にあつた。

ひととほそこで問ふであらう。ドイツツェルがその場合一定の經濟理論をば經濟理論そのものとして豫定してゐなくては、その理論の論理的根據を問ふことを以て方法論の課題が解かれたと考へえないはずではないか、と。

5) *ibid.* S. 370.  
6) *ibid.* S. 363; Beiträge zur Methodik der Wirtschaftswissenschaft (Conrad's Jahrbücher, N. F. 9, S. 208).

正にさうである。彼が理論と云ふ時に唯一つ思ひ浮べてゐるのは、古典學派の、特にリカルドウの段階における經濟理論なのである。彼は終始リカルドウに對して絶大なる尊敬を懷いてをり、リカルドウを評して「國民經濟學の最初のさうして恐らくは永へに最も顯著なる理論家」<sup>7)</sup>「經濟生活の最大の理論家」などと呼び、「リカルドウに對して敬虔を有つ義務を感ずる」と告白してゐる。すなはちデイーツェルの方法論の目的を端的に云へば、リカルドウの經濟理論の論理的根據を明かにすること、さうしてリカルドウの自然主義的理論を歴史主義からの攻撃から擁護することであつたのである。彼が證明する *demonstrieren* と云ふ言葉を好んで用ひてゐるのはこの目的から生ずる必然的な一つの歸結である。

リカルドウの經濟理論の論理的根據を問はうとするデイーツェルの方法論は、次のやうな構造を有つ。それは端的に云へば「孤立化的方法」*die Isolier-Methode* である。さうしてこの孤立化は對象と認識作用との両面から行はれる。

具體的な經濟的實在から理論の對象界が孤立化されるのは、次のやうにしてである。具體的な經濟社會は固有の「體制原理」*Organisationsprinzip* を有つてゐる。デイーツェルはロード・ベルトウスの社會思想の深い研究を通して、社會の體制原理には二つの相容れないものがあることを見いだした。それらは「個人主義」*Individualismus* と「集團主義」*Collectivismus* とである。「群」社會の體制原理が個人主義か集團主義であるかによつて、すべて社會現象には、従つて經濟現象には獨特の特徴を帯びて來る。しかし具體的な社會はこの相矛盾する二つの體制原理の何等かの程度の混合あるひは妥協によつて組織されてゐるのである。國民經濟と呼ばれて來たものもこの混合形態の一つに他ならない。だから方法的に國民經濟を把へようとするならば、先づ二つの原理に基く經濟體制を孤立化せしめてそれぞれ別個に認識し、その後でそれらの混合形態として具體的な國民經濟を把へるより他は

7) Ueber das Verhältnis der Volkswirtschaftslehre zur Socialwirtschaftslehre, S. 19.  
8) Der Ausgangspunkt der Socialwirtschaftslehre und ihr Grundbegriff (Zeitsch. f. ges. Staatswiss. Bd. 39, S. 4.)  
9) Ueber Verhältnis usw. S. 9.

なくなつて来る。かく孤立化せられた二つの對象界は「個人主義」的經濟體制と「集團主義」的經濟體制とである。前者は社會經濟と云はれて來たものであり、後者は——デイーツェルによれば——絶對主義的社會體制の中にその典型が見いだされる。従つて經濟理論は先づ二つの類型に分かたれる。「個人主義」的經濟體制の理論すなはち社會經濟の理論と「集團主義」的經濟體制の理論と。

〔註〕 デイーツェルは經濟學的方法論的な思索と平行してロード・ベルトウスの社會思想の原資料的な研究に従事した。その結果が一八八五年に初めて發表し、その翌年と一八八八年とに二部に分けて刊行した『カール・ロード・ベルトウス』である。この研究によつて、デイーツェルは彼自身の社會哲學的立場を確立したのであつて、彼の思想を全體として論ずる時には、この著述は絶對に無視できぬ重要きを有つてゐる。なほこの著述は、現在においても、ロード・ベルトウス研究として第一に推される聲價を荷なつてゐる。しかしこの點に深く立入ることは、本稿では不可能である。

ところでヨーロッパの社會の經濟體制は勝義において「個人主義」的である。「個人主義」は近世において「集團主義」的の絶對主義との永い困難な闘争を通して社會の支配的な體制原理たる地位を獲得した。だからこの支配的な經濟體制を對象とする社會經濟の理論が經濟理論の名を以て呼ばれてよい第一の理由がある。のみならず、社會經濟は經濟體制のうちで最も複雑な體制なのであつて、このものを理論的に認識すれば、「集團主義」的な經濟體制はそれの變相として容易に認識されるのである。社會經濟の理論における交換に媒介せられた複雑な生産論や分配論の代りに、後者においては「技術論」と「生産者の分配に對する要求の分類の理論」とが經濟理論の内容となり、全體として極めて簡單な理論となるであらう。この理由から見ても、經濟理論とはすなはち社會經濟の理論でなければならぬことが了解されるであらう、とデイーツェルは考へる。

このやうに經濟理論が二つの類型に分かたれ、且つその一つである社會經濟の理論が經濟理論たる地位につきうる所以があるとしても、二つの經濟體制に共通な範疇がないと云ふわけではない。經濟生活には社會體制的原

10) Rezension zur Menger's „Untersuchung usw.“ (gb. für N.-Ö. u. Stat. N.F. 8 Bd. S. 264.)

11) デイーツェルの個人主義の理論は國家學辭典第三版における Individualismus の項目によつて知ることが出来る。ここに於いても彼は獨特の考へ方を示し

理に關係のない一般妥當的な範疇がある。之をデイーツェルは「自然的範疇」と名づけて、理論の體系的敘述に當つては、社會經濟の理論の本論に入る前に論じてゐる。彼の唯一の體系的な理論の展開と見られる『理論的社會經濟學（第一卷）』は實はこの部分なのである。

さて對象についての「孤立化方法」の適用が以上の如くであるとして、次にこの孤立化を可能ならしめる原理が社會經濟の内に求められねばならぬ。さうしてこの原理の論理的根據を問ふことがデイーツェルの方法論の主要な主題なのである。彼の解答を端的に云へば、その論理的根據とは、理性的な私利に關心する利己主義から論理的に演繹せらるる經濟原則と取引あるひは交換の自由とである。この根據が對象の側にも認識主觀の側にもあればこそ、認識作用の「孤立化」が方法的に可能になり、また兩者の認識的交渉が認識せられるのである。

市民的な經濟理論の常套語であるこれらの概念の内容に立入つて論ずることは必要ではないが、彼がこれらの根據を論ずる際に見られる著しい特色は、通常行はれるやうな「動機づけ」(Motivation)をば一切排斥してゐることである。「動機づけ」理論の心理主義を排斥しようとするところに彼の論理主義的な方法論の核心が見られる。だから彼は經濟學の方法が歸納法であるべきか演繹法であるべきかとそれとも兩者の併用であるべきかと云ふミル以來の傳統的な論點に對しては、理論に關する限り、斷然演繹法を採用して歸納法を容れる餘地を承認しないのである。

デイーツェルの方法論の概要はほゞ上に紹介したやうな内容を有つてゐる。

### 三

殘された紙面において、先にわたくしが方法論史の研究に認めようとする意義について語つたことさらに關聯せしめて、若干の指摘を行なひ、それに伴つてデイーツェルの方法論に對する批判の要點を書きつけよう。

であるが、本稿にはふれることができない。

(一)——ドイツツェルの方法論的な思索の根本意欲について先に語つたやうに、彼はリカルドゥの追隨者として後者の理論の論理的根拠を探究することを以て方法論の課題とした。ゆゑに彼はしばしば「證明する」と云ふ字を好んで用ひ、社會經濟をば「理論によつて證明の地盤として撰ばれた状態」と云ひ換へたりしてゐる。<sup>13)</sup> われわれはここにおいて云ふことができる、ドイツツェルの方法論は經濟學一般の方法論であるのではなくして、リカルドゥの段階における經濟理論の認識論的基礎を求めることに終始したのであり、その意味で市民的な立場を一步も出ようとは圖らなかつたのである、と。彼のやうな理論家が歴史學派の陣營から出たと云ふことは、歴史學派が自然主義との抗争にも拘らず、實は同じ市民的な立場に立つものでしかなかつたことを示してゐるし、十九世紀の歴史主義の不徹底さを暴露してゐることもある。方法論的な思索が科學の發展におくられて始まると云ふ事態がここで極めて明白であるであらう。

(二)——しかしドイツツェルの方法論が單にリカルドゥの理論の認識論的根拠を確立すると云ふに止まつて、それ以上に毫も意義を有たぬ、とは考へてはならない。彼は社會哲學の研究によつて、社會經濟の理論の妥當するのほただ個人主義的な經濟體制だけであつて、集團主義によつて組織せられる經濟體制においては、全然別個の理論が妥當するであらうことを明言し、且つ社會の發展は集團主義的になる趨勢にあることを認識してゐたかに見える。この意味において、彼の方法論は歴史的相對主義に服してゐる、と云はるべきところを有つてゐる。尤も彼自身は個人主義的經濟體制の終熄を好まず、その再編成——組合主義的社會組織——にその存續を期待するのであるが、<sup>14)</sup> ともかくも社會經濟の理論が將來危機に陥ることのあるべきを豫測してゐたことは、固有の意味での自然主義者ではなかつた證據である。此意味で彼の方法論はミルの方法論よりも一步前進してウエーバーの理想型理論に内容的に近づいてゐることを知らなくてはならない。彼の方法論史上の地位は、ミルとウエーバー

13) Beiträge usw. (Jb. fü. N.Ö. und Stat. NF. 9 Band. S. 225).

14) この點についてはドイツツェルの Weltwirtschaft und Volkswirtschaft (1900) を見よ。

いとの中間に位すると云へよう。

(三)——デイーツェルの方法意識がいかなるものであつたかと云へば、十九世紀のドイツの歴史主義の特色を率直に表現してゐたと云はるべきであらう。その特色は特に歴史について論ずる限り自然主義と著しく對立するものではあつたが、理論的には自然主義と異なるものを有たなかつた。その理論に關する歴史主義の不徹底が、デイーツェルの方法論において率直にそのまま表現されてゐると云はなくてはならぬ。この點において、同じ陣營より歴史學派の自己反省から出發したウェーバーの方法論は、十九世紀の歴史主義の完成であるとともにそれを越えた劃時代的な意義を供へてゐたことが了解されて然かるべきであると思はれる。

(四)——デイーツェルの方法論は所謂近代理論の陣營からはそれに相應しい評價を受けてゐないやうに見える。このデイーツェルの過少評價と彼の方法論の理想型理論との比較とから、われわれは彼の方法論に一つの性格を賦與することがゆるされるであらうと思ふのである。それは彼の方法論が「似而非」理想型理論と稱せらるべきだと云ふ點である。

ウェーバーの理想型理論の中には理論の歴史性に關する深い省察が含まれてゐる。社會經濟の理論の妥當範圍が歐米にその代表を見るやうな近世固有の資本主義經濟體制であることを、ウェーバーは深く認識してゐた。この理論の歴史性についてのウェーバーほどの省察がデイーツェルの場合には見られないのである。彼の個人主義論が古代と近世との個人主義を個性的なものとして把へず、また經濟の「自然的範疇」の中に個人主義的體制のものをひそませてゐるやうに、彼の社會經濟の理論は一應は歴史的ではありながらそのままそれ以上の廣汎な妥當性を要求してゐるのである。だから歴史的な經濟的實在が「個人主義」と「集團主義」の二つの體制原理を有つ社會の混合形態であり、社會史は二つの體制の勢力の消長によつて把へられると考へるだけであつて、社會史がそれ

15) この點を深く論ずる餘裕がここにはなかつたことは遺憾である。

それに固有の體制原理を有つものの繼起であることが遂に認識されるに至らないのである。この理論における歴史性の省察の不十分さは如何に特色づけらるべきであらうか。

ウェーバーの没價值性理論は間もなく没價值性的であるべき理論の内へ價值評價的な態度をしのび込ませてゐる似而非没價值性理論と云ふ亜流を生んだ。それはウェーバーの理論に似て非なる俗流である。それと同じ意味において、理論の歴史性に關する感覺にみづから鋭敏であつた理想型理論の一つの頹廢形態であり俗流であるデイトツェルの方法論を、われわれは「似而非」理想型理論と呼ぶことができるであらう。

(五)——デイトツェルの方法論が「似而非」理想型理論と名づけられて批判の對象となりうるにしても、現在經濟學界においてこの方法論が全然無意義であることを意味しない。なぜなら、所謂近代理論と呼ばれ、十八世紀の自然主義や十九世紀の歴史主義とは質的に異なつた方法論的基礎に立つかに自稱する理論の眞の根柢は、深く省れば、デイトツェルのな段階に安んじてゐると信ぜらるべき理由が多いからである。詳しく論ずることはいまだできないけれども、近代理論の著しい特色は研究對象の歴史性の自覺の缺如であり、それは自然主義において見られたやうな抽象的な歴史意識さへ有つてゐないで、虚構の對象界について數量の變動の測定に従事してゐる。近代理論は方法論的根據に目をふさいで安んじてゐるけれども、その根據はデイトツェルが既に見究めてゐたのである。この意味において、デイトツェルの方法論は現代いまだ一度省みらるべきであらうと思ふのである。それに盲従するのではなく、その抽象性に安んじてゐず、それを乗り越えて新しい出發を有ちうるために。先に論じたやうに、すべて方法論的な考察はそれが生成した時代を越えて意義を有ちうるのであつて、科學の眞の意味での進歩は、煩はしい辻路とも見える方法論的な思索を歴史的に究める方法論史の研究をないがしろにしては、望み難いと云はねばならない。

(二六〇四・十一・十三)